

諮問第140号

景観審議会

景観遺産の登録について（諮問）

景観の形成等に関する条例（昭和60年兵庫県条例第17号）第21条の22第2項の規定により、下記のとおり景観遺産を登録することについて諮問します。

記

－ 第1次登録一覧 －

名称	所在地
1 シリーズ景観 織物産業を象徴するノコギリ屋根	
播州織工房館	西脇市西脇452-1
遠孫織布株式会社	西脇市高田井町938
神結酒造	加東市下滝野474
橋本裕司織布	多可町中区岸上391

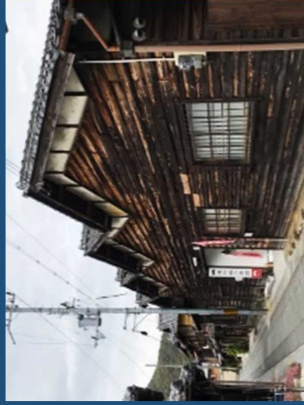
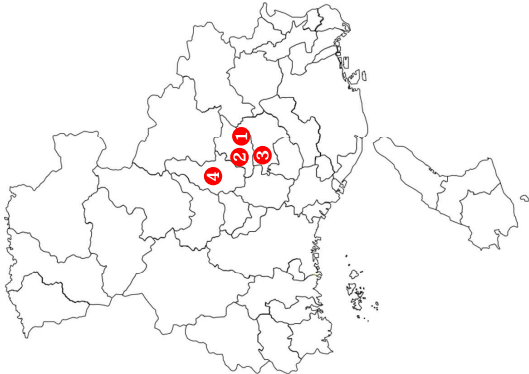
2 ストーリー景観 “和牛の聖地”～純血種「但馬牛」のルーツ～	
旧小南小学校熱田分校	香美町小代区新屋1562
民家跡	香美町小代区新屋1644ほか
熱田神社	香美町小代区新屋1602
旧熱田集落内棚田跡	香美町小代区新屋1543ほか
観音堂跡	香美町小代区新屋1562
越冬住宅と牛舎跡	香美町小代区野間谷68ほか

令和5年2月10日

兵庫県知事 齋藤元彦

自然光を取り入れるためにつくられた「ノコギリの刃」のような形状の屋根が連なる風景は、織物で栄えた地域の特徴的景観である。産業の衰退とともに展示・販売施設に転用されたものもあるが、今も尚まちなかに残る歴史的遺産として、地域の歴史を物語る。

【登録する建造物】



① 播州織工房館 (西脇市)



② 遠孫織布 (西脇市)



③ 神結酒造 (加東市)



④ 橋本裕司織布 (多可町中区)

【ノコギリ屋根について】

ノコギリ屋根は近代工場の象徴ともいえる存在で、産業革命当時の英国で、考案された屋根構造である。

織物工場において、採光は、生地の状態や色合いを見るために、直射日光を避けた、安定した照度の明かりが必要で、北側に向けた窓を設け、1日を通して均一の明かりを採り入れようとしていた。

また、屋根に窓が設けることで、広い作業場が確保できる利点があったこともあり、ノコギリの刃の形状の屋根に至った。

広い面積に均等に明かりを採り込むことができ、「ノコギリ屋根」、織物産業で繁栄したまちなみを象徴するものである。

【工場といえば・・・】

昔の地図では、工場のあるところには、三角屋根と煙突が描かれていたといわれている。現在でも、工場アイコンといえは同様の形状を示したものがよく使われており、ノコギリ屋根は、工場の象徴ともいえる。

【織物工場が多い地域は・・・】

西脇市や多可町などは、加古川、杉原川、野間川が流れる地域で、染色に重要な水資源に恵まれており、織物産業に適している地域である。

① 【播州織工房館 (西脇市)】

明治35年頃に建てられた織物工場を播州織製品の販売・展示を行うアンテナショップとして活用。

焼板を巡らせた外壁や木の格子窓が特徴的。手機織り体験など、体験型施設として播州織の魅力を発信する。

② 【遠孫織布 (西脇市)】

昭和27年頃ジャガー織物(播州織の一種)の工場として建てられ、現在も稼働中。併設ショールームにて、オリジナル生地的一般販売も行う。外観と併せて織物産業を身近に感じることが可能。

③ 【神結酒造 (加東市)】

戦後まもなくに織物工場として建設され、現在は隣接する酒造の倉庫や冷蔵庫として活用。新酒の時期には酒造工程の展示会場として活用。

④ 【橋本裕司織布 (多可町中区)】

昭和39年頃織物工場として建てられ、現在も稼働中。「播州織」のブランド Banshu-ori Next Japan として国内外に向けた同製品の魅力発信・製造販売に精力的に活動している。

のこぎり屋根の現状を伝える記事

「のこぎり屋根」の大部分、堤防工事で解体へ



神結酒造の「のこぎり屋根」の建物。全長約50メートル。このうち3分の2が解体される。全国でも珍しい光景で、関東から愛媛家が訪ねて来るともあったという



建物の中。濡れる光が往時の面影を語るようにだ



残ったのこぎり屋根の建物、倉庫や冷蔵庫として活用する

かつて播州織の工場を象徴した「のこぎり屋根」が消えようとしている。神結酒造(兵庫県加東市下滝野)では織物工場が使われていた建物を20年前から、社屋兼倉庫として利用してきた。だが6月、そばを流れる加古川に堤防を築くため大部分が解体される。地域の記憶を伝える屋根。その姿が変わる前にレンズを向けた。

のこぎり状の屋根は光を取り入れられるため、停電が多かった当時の知恵と工夫が生まれたとされる。

旧滝野町では播州織の最盛期だった昭和30年ごろ、50以上の工場が操業、のこぎり屋根も各地にあったという。その後、安価な外国製などに押され、現在、加東市内では3社ほど。往時の面影を残す屋根も今は数えるほどしかない。

神結酒造の「のこぎり」は、戦後すぐに建てられたかつての織物工場。屋内は手直ししたが、外観はほぼ当時のままで20年前から使用している。

滝野地域では2004年の台風23号で加古川が氾濫し水害に見舞われた。国土交通省は約2・7キロの堤防を築く工事を17年から開始。周辺では家屋の立ち退きが必要で、同酒造の建物も3分の2は解体される。「地域が生活していくためには必要な工事」と同酒造専務の長谷川妙子さん。一方で昔の光景が失われ、寂しさを募らせる住民もいる。

解体を免れる建物は窓をふさぐなどして、ほぼ現状のまま倉庫として使う。長谷川さんは言う。「これからは心に残る酒蔵でいたい。工事を出発点とし、残った建物とともに、新しい姿を次代へ引き継いでいきます」神戸新聞 (03.4.19)より

美方郡香美町
小代区新屋



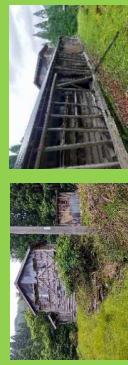
“和牛の聖地” ～純血種『但馬牛』のルーツ～

豪雪地帯である香美町小代区の秘境に佇む熱田集落跡。今日の但馬牛の貴重なルーツの1頭となった名牛「あつ」号の出生地であり、“和牛の聖地”として語り継がれてきた。2010年までの長さにより、都市部からの自然体験教室を受け入れた農泊の先駆けとなる民家跡が残る。



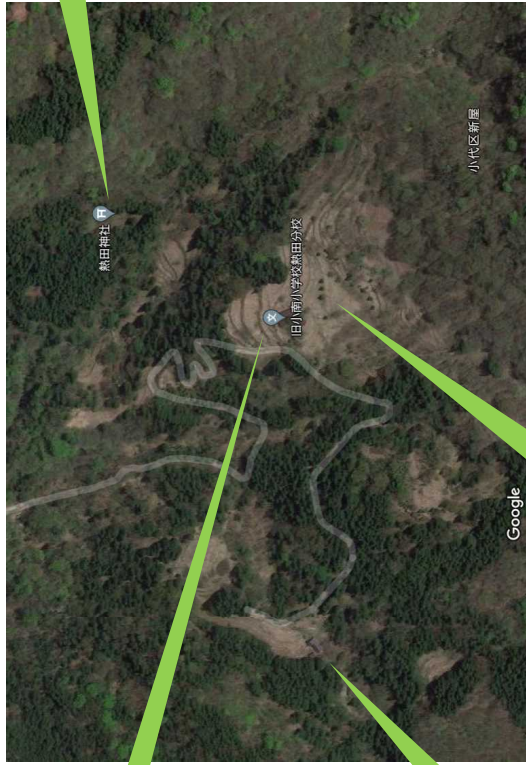
旧小南小学校熱田分校
観音堂

昭和16年、熱田分校開校。現在の校舎は、昭和34年に改築、移転されたもの。公衆電話が設置されたなど、集落の生活を支える施設もあった。校舎から見上げたところと一体を見守る観音堂の姿。



山間に佇む民家(田淵家)

牛と共に過ごしていた民家は、2010年までの約30年間、自然体験教室の受入施設として利用されていた。



熱田神社

熱田集落は、約800年前、尾張国(現愛知県)の熱田神宮に仕えていた田野氏が家臣を連れて移住してきたことが起源とされている。熱田神宮から分祀された「熱田神社」が、この集落を見守っている。



関連施設

越冬住宅と牛舎跡(香美町小代区野間谷)

1969年(昭和43年)へき地の不便さに雪害が追い打ちとなり、全住民9世帯約50人が越冬住宅へ集団移転。現在居住するのは1世帯1人のみ。住宅横には牛舎を設け、共に移転した牛の世話を行った。



分校前の記念撮影



田尻松蔵さんと但馬牛



昭和38年豪雪
ヘリコプターによる物資搬送



牛との生活の様子



分校の周りの風景
棚田等の風景



但馬牛を引き連れ
集団移転を行う様子



越冬住宅(共同牛舎も建設された)

約800年前 1394～1428年	尾張国から熱田神宮に仕えた田野氏が移住(熱田集落、熱田神社の起源) 金銀銅鉄が掘り出され栄える	起源
明治～昭和	小柄で小回りがさく但馬牛は、棚田を耕すために飼われ、家族同様に大切にされていた。明治以降、体格の大きな牛にしようとして外国種との交配が進められた。しかし、この集落は人里離れた秘境にあつたことから外国種との交配を避け、地域内の血統にこだわって牛を育ててきた。この集落で生まれた雌牛「あつ」の子孫たちは良牛ぞろいであり、熱田にちなみ、その集団は、「あつ」の遺子(つづる)と名付けられた。 「あつ」の家系から各種雄牛「田尻」が生まれた。現在の但馬牛は100%が「田尻」の子孫であり、この子孫たちが全国で和牛改良に使われてきたことにより、現在の黒毛和牛の99.9%に「田尻」の遺伝子が入っている。	歴史
1968年(昭和43年)	大雪の日、主婦5人が買い物から帰る途中に雪崩事故が発生	雪崩事故
1969年(昭和44年)	全住民が同町中心部に建設された越冬住宅に集団移転(熱田分校閉校)	集団移転
2020年(令和2年)	3月31日をもって自営会活動休止。昭和レトロな熱田分校、農泊のさががけ「自然体験教室」を受け入れた熱田の古民家、日本の黒毛和牛の改良に貢献した「あつ」が生まれた“和牛の聖地”が行んでいる。	和牛の聖地